

2.

蓮子
宇佐見

S t a r G a z e r

雲は近く、鞆は軽い。

京都に降り立って最初に言語化された意識はそういうものだった。なにぶん特別な言葉というものが簡単には思い浮かべられないたちで、でもそういう当たり前のこと、言わなくてもわかることを知覚することこそ生きるってことなんだろうなあ、と意味も無く感傷的なことを考える。別にこれから始まる京都での学生生活に不安を覚えてたり早くも東京が恋しかったりするわけじゃない。一人で京都を訪れるのもう三回目（大学を見学した時と、入試の時、そして今日）のことであって、駅から降り立った時の光景もすっかり見慣れてしまったし何も特別なことなんて感じないなあ、っていうだけの話。

雲が近いっていうのは、京都は建物の高さを厳密に制限しているからコンクリートジャングルと化してないおかげで空が遠くまで見渡せるからそう思えるということだ。京都は周りをすっきり山に囲まれた盆地で、視界の果てには緑色濃い山の影が聳え立っていて、その向こう側に浮かぶ雲に比べれば、私のすぐ真上にあるそれはまるで今にも落っこちてきそうなほど近く、九月の日差しからうまいこと我々を守ってくれた。

東京ではどこもかしこもビルだらけで（ほとんど空き家のくせに）、まず空を見上げることにすらままならない。どこにいても視界はすぐ建物に占められてしまうのだ。空と人との間を隔てる障害物が多すぎる。だからあのビル群に囲まれて暮らす人々は青空なんて忘れたように、全くそれを見ないで過ごすのだし、そんな彼らに対して星も瞬こうとしない。私たち一家の住んでいたあたりはそうでもないのだが、東京の中心部ではまるで藍色のテントで覆ってしまったかのように、夜空に星を見かけることはない。しかしそれを、東京という都市が長きに渡って築き上げた呪術的な結界の効果によるものだと主張する者もある。霊的要塞である東京は神や靈魂の力を内側に、閉じこもるために使ったわけだが、その結果換気が不十分になり窒息死しかけた国の機能を復活させるために神亀の遷都が行われたというわけだ。本当かどうか知らないけど。

千年以上昔、奈良で政まつりごとを行っていた朝廷は血みどろの政略によつてその地に積もり積もった怨念から逃れるように何度も都の場所を移した。平安京に至つてそれはようやく安定し、長い間朝廷は今の京都にあったわけだが、国家としての首都機能はやがて東京に移り変わる。が、それも二百年程度でやつぱり京都に戻ってきてしまう。京都というこの盆地には計り知れない強度があつて、そこに宗教的な背景が伴っていることは間違いないと思う。実証するには数百年後の未来を見ないといけないけれど。

——ああ、でも。

京都という街が霊的に安らかな場所かどうか、私の主観で決めつけることは簡単だ。

今し方、卯酉新幹線で居眠りした時に視た悪夢。

赤い夜空。

鳴り響くサイレン。

逃げ惑う人々の怒号。

大昔の戦争映画か怪獣映画か、しかしそれはスクリーンやディスプレイの中にある光景とは全く違う、温度や気配をありありと伴っている。

ビルや住居に殺到する人間たちは、しかし過密すぎる人口のために身動きが取れず、押し合いへし合いした挙げ句にどこへも逃げる事ができず——喰われる。

東京という街にいるはずのない獣たち。血に餓えたけどものに、その身を喰いちぎられる弱き人間。私はその地獄の光景を、ビルの屋上に立つ何者かの視点から見つめている。

その悪夢を、もう何度も、何年も視続けている。

夢は私を苛む現象。明るい夢なんて、この半生において一度も視たことがない。

もしこの悪夢が、東京という土地に埋まった無数の怨霊の記憶が生み出したものならば、京都でそれを視ることはないはずだ。

しかし、あるいは。

東京という霊都がその夢を視させているのではないとしたら。私は永久に赤い光景に苛まれなければならないのだろうか？ それにもまた、心当たりがある。

最初の悪夢。赤い悪夢を視始めるきっかけ。

幼い私はベッドで眠っている。当時住んでいた家の裏手には林があつて、当然人口植林による不自然な緑地であつて生き物が住んでいるはずもないのだけれど、そこから突如として一匹の化物が姿を現す。

真つ黒い二本足の化物は節々が捻れ曲がつた凶悪なシルエットをしていて、音もなく私の家に忍び込んでくる。敷地を取り囲む塀もしつかり鍵をかけた窓も存在しないかのようにするりと通り抜ける様はまるで影が立体化したお化けのようだった。きよろきよろと振り向きながら、ゆっくりと歩みを進める化物は、やがて私の部屋に入り込んでくる。

私はもうその化物の存在に気づいていて、でも恐くて心臓は破裂しそうで頭がいっぱいで、目をかたくつぶって何事もなくそれが通り過ぎるのを一心に祈っていた。でもそれは叶わぬ願いだった。だってその化物はこの辺りに何軒もある他の住居ではなくこの宇佐見家に這入ってきて、そして両親の寝室ではなく私のベッドへまっすぐにやってきたのだ。

何かをされるのはもう当然の成り行きとは思えない。

黒い化物は私のベッドに乗り込んで来て、身をきゅつと縮ませている私に覆い被さると、絶対に開かないように固く強くつぶった瞼に手を伸ばしてきた。

そして一対の眼球を無理矢理露出させる。そして、そして——ああ、おぞましい。化物はそのスプーンのような指でもってして、幼い私の目玉を抜き取ってしまう。私はもう、恐いとか嫌だとかいう気持ちを乗り越えてしまつて真っ白になっていた。痛みさえもない——いや、きつととつくに、化物が部屋に來た時点で私は氣を失つてしまつていたんだ。それで幽体離脱のような状態になつて、化物の様子を俯瞰するように眺めていたに違いない。自分の視界が、主観が、記憶があやふやになる。

私は、小さな目玉をふたつどこかへしまつた化物が代わりにガラス玉を取り出して空っぽになつた穴に詰め込んでいる姿を見ている。そして氣づく。これは夢なんだと。こんなおぞましいことが現実に私の身に降りかかるわけがない。

そして我に返る。私は地下鉄に向かう階段の途中でぼうつと突つ立つている。軽い鞆を手。白昼夢——というわけではなく、ただの空想だつた。そう、ただの、思い返すたびに心を奪われ我を失つてしまうほどの、空想。

実のところ、その光景を夢に視たという実感すら私にはないのだ。悪夢というべきはあの赤い夜空の夢のことで、それを視るようになったきっかけが、黒い化物。

出所のしれない記憶。

それを深く考えると、私は自分の心に作られた迷宮を永遠に彷徨うことになってしまふ気がして追求することができない。いったい何がどの順番で起こったことなのか、私には知る術がないし一生わからないままなんだと思う。

目玉を奪う黒い化物。

人間が喰われていく悪夢。

そして——私の目に宿った能力。

どれが本当で、どれが空想で、どれが夢なのか。

これから京都で暮らすことによつて、果たして何かが変わるのか。

何もわからないから今は気楽に構えるしかない。ため息一つついて、私は歩みを始めめた。新しい住処へ向かうために。

鞆が軽いのは、中にほとんど何も入っていないからだ。それはこれから色んなものを詰め込んでいくためのものであつて、古巣から何かを持ち出すためのものではない。

枕が変わつても平気で眠れる私は、数着の衣服を実家から宅配便で送つた他には私物を何も持ち出さなかつた。これから住まうことになる学生寮は二人部屋で、余計なものを置いておく場所なんてあるわけないから。

大学からほどよく近い学生寮。木造の三階建ては記号めいたレトロさを漂わせている。古き良き寮の姿を残し続けているのだという。でもそれは確かに現代建築の仕事であつて、集成材のパズルでしかないように思える。神社でもあるまいし、呼吸する生きた木材を使うわけなんてないだろう。そんな息苦しいアレルギーの恐れもあるからだ。

だだっ広い玄関の土間に立つて管理人を呼ぶ。「東京から来た宇佐見蓮子です」と言う
と、人の良さそうなおじさんが出てきて手続きをしてくれる。

「君と一緒に住むのは頬白鮫^{ほまじろざめさへこ}子^こつて先輩で、かわりもんだけど悪い人じゃないから彼女にいろいろ教えてもらおうといいよ。困ったことがあつたらいつでも管理人室においで」

ずいぶんと賑々しい、言つてしまうとペンネームみたいな名前の先輩だ。まさか本当に人喰い鮫というわけもないだろうけど、名前の方に牙というが入つて悪い意味でできすぎになつてゐるあたり、両親に大事にされてこなかったのかとか余計なことを考える。

古い板張りの風格を漂わせながら当然のようにぎいぎい鳴つたりはしない廊下を進んで、管理人さんは私の住居となる部屋に案内してくれた。

こんこん、とノックする。

「はあい」

色んなことに慣れきった女性の声がする。まるで千年前からよくしつけられたオウムでも中にいるかのようだった。もちろんそんなわけはなくてそこに住んでいるのは人間の女性で頬白鮫冴子で、マツトな質感の黒髪をだらりと下げた所作が似合うさっぱりとした人だった。人目を引くほどの美人ではないけれど、着飾れば地球上のどんなところにいても容姿が原因で誰かを不機嫌にさせるようなことはないだろう。その気になれば髪をたくさん伸ばすことも思い切つてショートカットにしてみようともきつと自由なのだろう。私なんて切りすぎると小猿のように阿呆っぽいと言われるしかといって伸ばし始めると陰鬱さが増して呪い人形のようになるからやめろと言われる。「東京から来た宇佐見蓮子です」

「聞いてるよー。同じ部屋に住む頬白鮫冴子です。どんな子が来るか楽しみにしてたけど、思つてたよりずつとかわいい子に来てもらつてうれしいな」

そう言つてさらつと涼風のような笑顔を浮かべる。同じ内容でも例えばこれを入社して配属された部署の上司が言つたとしたら即減給処分になるようなセリフだけれど、もちろん頬白鮫冴子に悪気は無いし私も嫌だとは全く思わなかった。

「東京ねえ。うちも親まで向かうだったよ。私は生まれたときから京都^{こっち}だけど」

遷都以降、年々首都に人口が集中してくるのは当然のことだ。

東京は年々コンクリートが朽ちていつて田舎の風情を丸出しにしてくるし、田舎らしい独特の価値観が先鋭化していくのも目に余る。子供に無菌的な教育を施したい親は必ず東京を出て行くことになるが、我が家の両親は子供が間違ったことを覚えたらきちんと叱るという覚悟を持っていた人なので私はそれほど東京に染まっではない。しかし東京人らしい気質はやっぱり身についてしまうのか、物体主義なところは人に指摘されても直す気はない。実家の部屋は無闇に集めたガラクタや紙の書物なんか山をなしている。それでも京都に持つてくるほどの重病ではないし、物が無いというのもさっぱりしていいと思う。「まあ実家はど田舎にあつて通学が面倒だから、こうして学校のすぐそばに入寮しているんだけどね。何せまだ手動車が走つてるようなところだ」

手動車というのは人間がマニュアル操作で運転する乗用車——かつて自動車と呼ばれていた車両を揶揄して呼ぶ名称だ。何せ全然自動じゃないからね。土地が安くなつて技術が進歩したおかげで地下鉄がぼんぼん気楽に作れるようになってかつてのバス網を置き換えるほどになった。運転操作まで自動のロボットカーが新時代の主要移動手段になると当て込んで大損こいた人もいるらしいが、もうパーソナルな乗り物が必要な時代じゃないしあんなのは国の補助金も出なくて個人に買えるものじゃなかったのだ。宅配サービスの車両が歩行者みたいな有機的な動きで街中を駆けていくのを見る程度だ。

「ところで宇佐見君いくつ？」

齢を訊かれたので九つですと正直に答える。

「ストレートかあ。そうだと思ったけど」

まだ一年で六センチは背が伸びる年頃だ。一歳違うだけでも結構な体格差があるところ、頬白鮫冴子と私では見上げるほどの差があった。「先輩は？」少しためらったけど訊いておいた方がいいんだろうなと思ったので尋ねる。

「私は今年で十六。義務教育^{ギムキョウ}終えるのに手間取つてね。まだ三回生よ。こつちでも全然単位足りてないし。宇佐見君の方が先に卒業できるかもね」

自嘲気味に言うが自らを恥じている様子はない。先述の通り子供の年齢による体格差は如実にものを言うもので、自分より大きな子供がいなくなっても初等学校に在籍していることにストレスや劣等感を覚えるというのはあるだろうけれど、それで実際に年上の児童を心の中で見下したりするのは誰に言われるまでもなく悪いことだ。私は最短で高等教育に上られるコースに乗ることができたが、それは本当に幸運なことで誰にでも可能なことじゃないという自覚がある。

それに何でも早ければいいというわけではない。大学で学ぶうちに最短コースを進むのに疲れてほどほどに手を抜いて時間をかけて卒業する、というのもよくある話だ。

「宇佐見君なんか飲むー？ 大抵のものはあるけど」と言われたので正直にコーヒーを所望する。頬白鮫はお茶やコーヒーの粉末がある場所を教えてくれた。寮は室内までレトロな雰囲気丸出しで作られているのでついガスコンロにヤカンでお湯を沸かすのかと思ってしまうがそんなわけはなく、新しい給湯器が備え付けられていて清潔な熱湯が供給されるようになっている。

「煙草吸っていいかね」

コーヒーを運んでちゃぶ台を挟んで向かい合って座って、一息ついたところで頬白鮫の子がそう尋ねてくる。喫煙者と同室というのは事前に了承を取っているのですがどうぞ好きにと答える。彼女は身体に染みついた動作で煙草を取り出し電子ライターで着火する。口にくわえてちよつとしてからゆつくりと煙を吸い込んで、吐き出す。紫煙という言葉がかつてあつたけれどもう死語で、頬白鮫が吐き出した空気に色はない。現代の煙草は部屋も肺も汚さない。

「宇佐見君は吸わないの？」「ええ、私は」「そ。悪いね」「いえ、どうぞお気になさらず」「お酒は？」「まあまあ。日常的には飲まないです」これは嘘で、本当は大好きだ。実家ではよくビール瓶を転がしながら本を読みふけて過ごしていたので何度となく親から指導を受けた。

「私天然物のお酒飲んだことあるけどさ、御神酒をちょっと失敬して。一口でぶっ倒れたよ。あんなもん昔の人は日常的に飲んだなんてちょっと信じられないねー」

そう言つて頬白鮫冴子は笑う。

「天然のもの不用意に口にしたらたいいお腹壊しますからね」

「そうだね。今だつてお酒や煙草は体質によつて摂取量を厳しく制限管理されてるけど、昔のそれに比べれば驚くくらいに微弱な刺激物でしかないんだよ。天然色の時代はそれを個人の裁量で好き勝手に摂取できてたつていうんだからあきれるわ」

アルコホリックとかニコチニズムとかいう言葉が跋扈していた時代の話だ。酒と煙草、その他の嗜好品にまつわる社会問題は教科書一冊でできてしまうくらいに重要な事案ではあったが、食糧改革とともにあっさり解決してしまう。今の煙草やお酒は精神にだけそこそこ作用するが人体への毒害は天然物の百分の一以下だとか。毒をあえて摂取することを好んだ昔の人の考えはわからないでもないが、それを取り上げられるや否や合成の同種品にこそつて皆飛びついたというのだから、人間は口にするものの本質的な部分を求めているのではなく形が取り繕えればなんでもいいのだろう。

そういう考えを口にするに「ははっ、宇佐見君聡明だね。確かにそういうもんだ」と笑つて頬白鮫冴子は三本目の煙草に火をつけた。

コーヒーを飲んで落ち着いたので、私は携帯端末を取り出して来週から始まるカリキュラムの確認とかを始める。頬白鮫冴子はそれを見て押し入れの中に私のためのディスプレイが転がっているのを思い出して引つ張り出してきた。押し入れの中はなんだかよくわからないものだがやがやしていて、私は見なかった振りをするのだが先輩はまあじきに片付けるよ、と言つて煙草の火を揉み消した。

「宇佐見君の荷物これから届くの？」

「指定したんで明日の午前に。でもそんなにないですよ。ひと箱だけだし、着替えを何着か入れてあるだけですから」

「ほんとに？ 東京の人だからいっぱい収納使うと思つたんだけど」

やつぱりそういうイメージがあるんだ。押し入れの様子を思い出すに、頬白鮫冴子の方がよほど東京人っぽい暮らしをしているようだった。

「まあこつちでおいおい揃えていくつもりです」

「そう。私なんかいっぱい物持つてるけど、持つてるだけで所有欲ないから好きに使つていいよ。服とかぜんぜん私の着ていいし。つてサイズがあわないか。あはは」

どんな服を持つてるのか知らないけど、今の頬白鮫冴子はゆつたりとしたチュニックを着慣れているようで、私の好みとはちよつとあいそうにない。

「宇佐見君その帽子トレードマーク？ 似合ってるね」

帽子掛けを見つめながら言う。トレードマークって言葉はリアルで初めて聴いたと思う。

私は大昔の学生ふうというか魔術師ふうというかそういうファッションが好きで落ち着く感じがして、たいてい白いブラウスにダークカラーのスカート、マントかケープというふうに揃えている。帽子もいくつか持つているけど色的に遊びがなくて、それにあわせて服を揃えているから全体的に地味になる。東京人の無闇に派手なファッションが肌に合わないとは常々思っているが、こうして考えてみると自分には東京らしさが欠けていた。別にそんなものを主張するつもりはさらさらないけど。

それから頬白鮫冴子に大学での過ごし方をいろいろ教えてもらう。専攻が全然違うのでカリキュラムについては参考にならないが、まあ学科でオリエンテーションとか新歓とかがあるのでそちらについては全然心配していない。

地図を開いて校内のこととか周辺のこととかあーでもないこーでもないと思ふと益があつたりなかつたりする話をいろいろ聞いて、実際のところは自分で歩いてみないとよくわからない。地下鉄の路線も京都駅からここに来るまでを覚えるので精一杯だし、さすがに首都での生活は一息に飲み込めるものではない。でもアクセスの煩雑さは東京の方が圧倒的に上だと思われた。向こうは区画整理が全く追いついていないのだ。

私の京都での新生活初日はそういうったふうに、部屋で先輩と会話しているだけで過ぎていった。お腹が空いたので寮での食事について尋ねると、日替わりで好きな時間に食べられる献立が食堂で買えるからそれを食べるなり、どうせキャンパスがすぐそばだから学生食堂や売店で好きなものを買うもよし好きにしていいたいことだった。

「私食べないからさ、まあごゆつくり」

頬白鮫冴子はそう言つて、灰皿を片付けたばかりなのに新しい煙草に火をつけている。食べない、というのは珍しくはあるが異常ではない。サプリメントで済ませているのかもしれないし、大学で研究している栄養学的ななにがしかのモニター試験を受けていて、煙草を吸うだけで生きていけるようになっていいるのかもしれない。あるいは体内にナノマシンを入れているか……食事そのものが本質的に生きる手段でなくなつてから、どう効率的に栄養を摂取して生きるかという研究は加速的に進んでいて、最先端の現場ではどういふことになつていいるのか全くわからない。最初に合成食品のイロハを確立した企業は一時的に国内トップレベルの経済成長を果たしたがその後戦国時代的な開発競争をリードすることができず、買収と売却を何度も繰り返された結果いつの間にかブランド名すらなくなつてしまつていた。多くの人々は形を取り繕つた食品を口にすることに満足していて、それを開発している人のことなど思ひ浮かべもしない。

食堂に行つて和食洋食二種類の献立が並んでいるのを見て、少し迷つてから和食の方を買う。一般的なお店ではパン一個分にも満たない値段。自動調理器にかけて一分であつたかいご飯にありつける。食堂はその広さに対して賑わつていゝというほどではなく、それは食事の時間が完全に自由だからだろう。七人くらいのグループが歓談しているほかは、個人で口を素早く動かして咀嚼している人がまばらにゐるくらいだった。

「いただきます」

その食事が私の口に入るまでに関わつた人々への感謝を簡単に口にする。なにぶんそれは自動的なことで、そこまで深く考えてゐることもないが、昔は生き物の命や大自然の営みを奪つて食事としていたわけで、その頃に発していた「いただきます」と比べれば重みも何もかも全然違うよなあ……と思ひながら食事を済ませる。一人で食べるとあつという間だ。もう一度食堂の風景を見やると、一人でやつてくる学生は機能的に食事をするためにやつてきてゐるわけで、さつさと食べて部屋に戻つていく。一方グループで机を囲んでいる人たちはどちらかというと歓談を楽しむために広い部屋へ集つてゐるといつた趣旨があつて、おしゃべりに集中するためにやはりさつさと食事は済ませている。

このように現代日本では食事に対するありがたみはほとんど完全に薄れてゐる。命を取り扱つてゐなかつたの食事とは性質が違ふのだからそれが自然だと思ふ。